

高まる社会への関心

長野県佐久長聖中学校教諭 北山 英一

1. 実践の概要

当校のNIEは二年目である。特定の教科・クラスに限定せず、全職員に実践を呼びかけている。

本校ではNIE実施にあたり、「ために行う」姿勢ではなく、あくまで自然体で新聞を活用することを考えている。授業を離れても生徒が自然に新聞を開く雰囲気を作る、それが第一の目標である。身近な素材である新聞を通して考え、社会的関心を高め、知識を吸収するという事は一生続けてほしいことである。NIEの実践はそのきっかけを生徒に与えてやることであろう。

96年度まではコラム朗読、レポートの素材等を中心にした活用であったが、それを受けた97年度の実施内容は概ね次のようなものであった。

- (1) ショート・ホームルームでのコラム朗読
- (2) 道徳教材としての活用
- (3) 授業での活用
- (4) 定期考査での活用

96年度に行ってみた各クラスでの切り抜きは、さしたる効果を上げなかったため97年度は行わなかった。

コラム朗読の実施に際しては、一週間の各紙の中から各クラスの国語係が気に入ったものを5編選び、切り貼りを行った後、印刷して全校生徒に配布した。それ以外に関しては各教科担任・クラス担任の判断で行われ、特に統一的なテーマを追求することはなかった。ただし、1学年はパラリンピックを観戦することもあり、前もって関連記事を調べさせるという指導を行った。

社会科の公民分野では、毎日の新聞記事の中に授業と密接に関わるものが多く、授業だけでなく定期考査等でも活用した。また、中学生が関与した事件が多く起こった年でもあり、ホームルームや道徳の素材として活用することも目立った年であった。

コラム朗読については、NIE実践の指定を受ける前から実施しているが、97年度はどちらかというと低調であった。その一つの理由としては、不景気や官僚・財界人の不祥事、陰惨な事件が多く、コラムを文章として味わう、という意味では魅力のある素材が少なかったことが挙げられよう。

2. 新聞の配置場所・方法

資料情報センター（図書館）の向かいの一室をNIEルームとして、机の上に「信濃毎日」「朝日」「読売」「毎日」「日本経済」「産経」の各紙を配置した。それぞれの新聞は綴

じられており、何ヶ月か前の記事も調べることが可能となっている。また、資料情報センターには英字新聞を含め3紙、生徒寮には「信濃毎日」と「朝日」を各2部ずつ配置してある。資料情報センターにはコピー機が置いてあり、NIEのためのコピーは無料となっている。ただし、コピーをとる場合以外はNIEルームで気軽に新聞を開くという段階には至っていない。むしろ、給食後や休み時間に、寮や資料情報センターで新聞を開いている姿を見かける。

3. 実施の内容

(1) ショート・ホームルームでのコラム朗読

主として朝のホームルームでコラムを読んだ。当初は新聞社から出ている集冊版を利用していた（「天声人語」と「斜面」）が、各担任から数ヶ月遅れのものではピンとこない、もっとタイムリーなものを、という声が寄せられ、国語科教師の指導の下、国語系の生徒が交代で前週の各紙のコラムの中から気になったものを探して、切り貼りすることとした。全校対象であったが、年間を通して最も積極的に行っていたのが2年生である。なお1年生に対しては入学時にコラムを読んで難しい言葉を調べ、感想を書くという課題を出している。

(2) ロング・ホームルーム・道徳の授業での新聞記事の活用

97年度は中学生をめぐる事件が社会を騒がせた年であった。また、オリンピック・パラリンピックが開催され、本校卒業生も両大会に出場した他、アイスホッケー見学等観戦や聖火ランナー応援等もあり、良い意味でも悪い意味でも生徒が新聞を開くきっかけを作りやすい年であった。

そういう中で、パラリンピック観戦をした1年生に対してはアイススレッジホッケーをはじめとするパラリンピック関連の記事を調べさせ、また紹介を行った。なじみの薄かったパラリンピックについて、新聞を利用して関心を高めたいと考えたのである。（添付資料参照）

また、オリンピックで活躍した清水選手らの新聞に掲載された言葉は、いろいろな場面で引用された。

次に挙げるのは3年生の道徳教材として利用された記事である。

- ・ 7月5日付『朝日新聞』社説「写真掲載はなぜ許されないか」
- ・ 7月11日付『読売新聞』日野啓三「流砂の遠近法」〈成人儀礼なき少年たち〉
- ・ 8月26日付『朝日新聞』「私空間」萩尾望都〈存在理由〉
- ・ 9月30日付『読売新聞』宍戸修「現代のナルキッソスたち」
- ・ 1月27日付『朝日新聞』「ガンジー没後50年 森本教授に聞く」
- ・ 2月4日付『朝日新聞』「声」欄「古賀選手の話 私を勝たせた」
- ・ 2月20日付『朝日新聞』社説「選手は『日本』を飛び越えた」

(3) 教科の学習での活用

授業で積極的に新聞記事を利用したのは中3社会科（公民分野、担当・荒居隆行）である。

例1 6月10日付『毎日新聞』「小杉元巡査長 立件は困難」という記事を読み、以下の各点について考察せよ、という補助プリントを使った授業。

例2 6月24日付『朝日新聞』「SMAPらのおっかけ助長『ダメ』」という記事を紹介し、典型的な権利衝突型の事例と言えるが、問題となる憲法上の条文を全て挙げてみなさい、という補助プリントを使った授業。(添付資料参照)

特に例2は人気グループの事例だけに、生徒達の反応はよかったようである。

中3国語科では3月9日付『読売新聞』「編集手帳」の若者言葉についてのコラムを紹介、文法の授業に利用したりした。

(4) 定期考査での活用

中3社会科では新聞記事を利用した定期考査の問題を作成している。(添付資料参照)

4. 実践の成果と感想

生徒の生活記録ノートを見ていると、印象に残った新聞記事について感想を書いてくる生徒が学年が上がるにつれ出てくる。ホームルームや授業で紹介した記事によって励まされたり、義憤を覚えたりする生徒がいるし、萩尾望都の〈存在理由〉を読んで、自分の存在理由を考え始めた生徒もいる。NIEの実践が生徒に新聞を読むきっかけを与え、ひいては生徒の社会的関心を高め、人生を考えるのに役立ったことは間違いないようである。次に、実践した感想や今後の課題等について述べてみたい。

(1) コラム

以前から佐久長聖高校ではコラムを毎日全クラスに配布しており、要約練習などにも使用してきた。中学校でも要約指導は可能であるし現に指導した経験もあるが、まずは読むだけでも意味があると考えている。しかし、最近のような殺伐とした事件や、官僚・財界人の不祥事のような暗い話題が多いと、読ませたいという教師側の気持ちが萎えることもある。必ずしも文学的・人生論的なものばかりである必要はないと思うが、生徒が励まされたり、心温まるような話が少なくなっているような気がする。これはコラムを毎日読む、というふうに固定的にしていることからくるマイナスかもしれない。もっと幅広く記事を探す方が、心を育てるという意味ではよいかもしれないとも考えている。

要約指導について言えば、少なくとも中学生段階では、読解力や社会への関心の度合いに応じて異なった文を教師が選択した方がよい。毎日のコラムが必ずしも要約練習に適しているわけでもないことも踏まえて指導すべきだと思われるし、読解力のある生徒には社説を与えるなどの配慮も必要になる。

なお、ショート・ホームルームを使ってコラムを毎日読むということはそれだけでも意味のあることであるが、10分間読書等の他の試みを行ったりすると、時間の確保が難しくなる。教師が印刷・配布だけすれば、生徒が自分で休み時間に勝手に読む、というようになれば理想的であるが。

(2) 道徳教材として

新聞記事は確かに理科・社会・国語などでトピックスの紹介等に活用できるが、道徳の教材としての使い方も意味がある。生き方を考え、励ますよい素材が新聞には多い。教師がコラムだけではなく文化欄・社説・投書欄等に絶えず目を配っている必要がある。

(3) 授業や定期考査等での活用について

科学上のあるいは歴史上の新発見等のニュースの紹介は、NIEの実践としては行いやすいものであるが、それだけでは単発で終わりかねない面もあるし、進度上の問題からも

授業の中にうまく組み込むことはできにくい。むしろ、長期休業中の課題として、自分でトピックスを探させるという96年度の理科での実践を継続させた方がよいかもしれない。ゴミ問題や障害者をめぐる問題など、テーマを決めて記事を探させ、場合によってはそれに基づいたレポートを書かせるという試みは、ある問題について生徒を啓発したい時には有効である。また中3社会科の公民分野の授業では97年度のような実践を継続・発展させていくべきであろうし、定期考査でも活用が十分可能である。国語では学年が進むにつれて、文化や社会について考える機会を与えてくれるような文章を読めるようになっていくので、文法問題の素材としてだけではなく、幅広い活用が考えられる。

(5) まとめ

コラム学習は、中1・中2段階の生徒に社会で問題となっていることやその背景となる知識を教えるよいきっかけである。コラムの要約練習は、教師側の負担も大変だが、読解力・表現力を養いたい少数の生徒を対象に、文を取捨選択して行えば効果がある。社会の公民分野では、日々の政治や経済、社会の記事がそのまま使える側面があるが、だからこそ記事の取捨選択と、どう授業の中に位置づけていくか、教師の力量が問われるところでもある。科学や歴史上のトピックスの紹介については、まず教師がそのニュースに感動することが大切である。教師自身があまり関心のないものについては、受け取る生徒も驚きをもって記事を読むことはない。NIEを「ためにやる」ことを避けたいのは以上のようなこともあるからである。逆に言えば、教師が熱意と工夫をもって取り組めば、いろいろな面で生徒に考える力をつけさせることにつながるだろう。

課題として新聞記事を集めさせたり、授業で使ったりするのは勿論のこと、ホームルームでの担任の「今日の新聞に……についての記事が出ていたが」という自然な言葉も生徒に新聞を読もうという意識を植え付けるのに役立っている。そういう中から、教師が働きかけなくても自然に新聞に目を通す生徒が増えてくるのが、嬉しいことである。